

## 帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域 最終報告書

## 帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域の概要

## 1 平成14年9月1日現在の推進地域内の以下の児童生徒数

ア	海外帰国児童生徒（海外に1年以上在留）在籍数	2
イ	中国等帰国児童生徒数	93
ウ	日本語指導が必要な外国人児童生徒数	79

## 2 推進地域の特色

高知市は、人口約33万人の県庁所在都市であり、平成10年度から中核市となった。県下全人口に対する割合や全児童生徒数に対する割合が、いずれも約40%を占めている。

## 3 帰国・外国人児童生徒の実態

高知市には、平成11年度まで四国で唯一の中国帰国者自立研修センターがあり、日本語指導及び生活適応指導等を行っていたために多くの中国帰国者が在住している。また、高知市では、昭和54年から高知市教育研究所で中国帰国児童生徒を受け入れている。これらの中には中国残留婦人・孤児の呼び寄せ家族が多く、高知市教育研究所が近くにあり、すでに帰国している家族や親類が近くに住んでいるという理由から、1小学校、1中学校（潮江南小学校、潮江中学校）への就学が多い。一方、高知大学がある市内西部地域には、留学生等の家族や、外国人児童生徒が居住している。

また、近年は中国以外からの児童生徒の受け入れも増加傾向にあり、日本語指導が必要な児童生徒の母国語も、中国語の他にスペイン語、イタリア語、ヒンディー語などがあり、これまで以上に多様な対応を迫られている。

児童生徒の日本語能力という点では、個によってその状況が大きく異なっている。在住期間の短い児童生徒にとっては、日常生活に必要な言葉の習得が急務である。これは子どもだけの問題ではなく、家庭では両親が中国語しか使用しないために語彙が不足し、助詞の使い方が正確に身につかないといった現状が報告されている。それだけに、保護者に対する取り組みも不可欠である。一方、両親の帰国後に生まれたり、在住期間が長くなった児童生徒は、日常生活での支障は少なくなりつつあるが、教科の学習に関わる語彙が不足がちな傾向がみられる。また、在住期間が長くなるにつれて、次のような課題も見えてきた。

- (1) 中国語や中国のことを知らない子どもたちに、どのようにして母国の文化に対する誇りをもたせるのか。
- (2) 将来の希望につながる進路について、どのように指導・助言していくか。
- (3) 生活習慣の違いなどから、学校でより良い人間関係をつくることができず、帰国の児童生徒以外に友人関係がつかれない等の問題にどのように対処していくか。

こうした現状を受けて、指導の重点が日本語の指導そのものから、教科の指導へと広がりつつある。また、学習会では、「母国のことを忘れない、母国のことをよく知る」ということに主眼をおいた活動も展開している。

#### 帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域センター校の概要

学校名	高知市立潮江南小学校	校長名	岡 則明
所在地	高知市高見町 2 4 8 - 1		
学校規模	児童数 4 5 4 名, 学級数 1 6		
電話番号・FAX番号	TEL:088-882-0123 FAX:088-882-0124		
ホームページアドレス	<a href="http://www.kochinet.ed.jp/ushioeminami-e/">http://www.kochinet.ed.jp/ushioeminami-e/</a>		
学校名	高知市立潮江中学校	校長名	山崎 義寛
所在地	高知市塩屋崎町 1 丁目 2 - 2 0		
学校規模	生徒数 4 7 3 名, 学級数 1 5		
電話番号・FAX番号	TEL:088-832-6636 FAX:088-832-6260		
ホームページアドレス	なし		

#### 帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域体制の整備

##### 1 教育国際化推進連絡協議会の概要

###### (1) 構成員

学校長 5 名 大学関係者 2 名 日本語指導担当教員 1 名  
高知県教育委員会 1 名 高知市教育委員会 2 名

###### (2) 活動状況

第 1 回連絡協議会 平成 14 年 6 月 3 日 (月)

(内容) ・ 委嘱書渡し ・ 要綱, 事業概要説明

・ これまでの取り組みの現状と課題 ・ 14 年度の研究計画

第 2 回連絡協議会 平成 15 年 2 月 17 日 (月)

(内容) ・ J S L カリキュラムによる授業参観 (高知市立潮江南小学校)

・ 本年度の各校の取り組み状況 ・ 日本語指導担当者会の取り組み総括

・ 15 年度の取り組みについて

### (3) 協議会設置の効果

これまで帰国児童生徒の在籍する学校単位の取り組みであったのが、実践交流することや課題について協議をすることを通して、帰国・外国人児童生徒と共に進める教育のあり方について、共通認識することができた。また今後、各地域に点在する可能性の高い、外国籍の児童生徒を受け入れるにあたっての学校の体制作りや日本語指導教員の仕事についての理解を深めることができた。さらにJ S Lカリキュラムに基づいた授業研究会を協議会において実施することができ、児童の実態に合わせた系統的な日本語指導のあり方についての研究を深めることができた。こうした点において、大学関係者2名を委員に委嘱したことが非常に効果的であった。

## 2 教育相談員の派遣状況及びその効果

### 派遣状況

番号	場 所	派遣内容	相談員数	派遣回数	時間
1	潮江南小学校	中国語指導・カウンセリング	5人	56	126
2	鴨田小学校	教科指導・カウンセリング	1人	24	48
3	横浜新町小学校	中国語指導	3人	45	89
4	旭小学校	教科指導・カウンセリング	1人	17	34
5	潮江中学校	教科指導・カウンセリング	1人	22	35
6	教育研究所	教科指導・進路指導・カウンセリング	3人	43	246

#### (中国語の保持伸長)

年間を通じて中国語の保持伸長のため、留学生の方に相談員を依頼し、中国語の言葉や歌を教えてもらったり、中国語の絵本を読んでもらったりして中国語に親しんだ。

#### (教科指導について)

中国帰国及び外国人児童生徒のほとんどは、驚くほど短期間で何とか日本語が話せるようになる。担任や周囲の者は授業も理解できるのではないかと考えるが、教科の学習となると、ちょっとした表現や言葉につまずいて理解できず、学力が伸び悩む状況がある。今後は、個々の児童生徒の実情に応じて、日常生活で中心に使われる生活言語と、実際の学習場面で使われる学習言語を分類しての指導を行う必要があるという課題が明確になった。この点については、本年度から研究に取り組んだJ S Lカリキュラムによる授業の実践を、積極的に推進していく必要があると考えている。

### (進路指導について)

中国帰国の生徒の大半は高校進学を希望している。学校側でかなり早くから進路指導が行われているが、保護者や生徒は日本の社会状況を理解することが難しく指導が困難な状況があった。学校側の進路提案が生徒の希望と異なると、必要以上に自分の能力を否定されたように感じる傾向があったが、相談員が保護者や生徒に中国語で説明することで、学力と志望校の仕組みが理解でき、個々の児童に適した進路指導を行うことができた。

### (カウンセリングについて)

中国語がわかる相談員を招き、生徒と共に学習をしてもらった。帰国して間もない生徒にとっては、学校で唯一の母国語が分かる大人ができたわけで、「日本語への適応」という面では非常に効果的であった。また相談員と生徒でコミュニケーションがとれるというだけでなく、担当教員も生徒の中国語での会話に加わることで、「生徒の気持ち」に充分触れることができ、言葉が理解できない、通じない心的ストレスを解消し、カウンセリングの効果も十分に果たしていた。

14年度は中国語が堪能な相談員が派遣されたことで、家庭にも日頃から気軽にコンタクトを取る事ができ、日本の生活に慣れていない保護者にはよき相談役となっていた。

平成14年度の具体的な取組内容とその成果等について

#### 1 研究主題

中国帰国児童生徒と共に学ぶ国際理解教育

- 中国帰国児童生徒等への指導のあり方と地域との連携について -

#### 2 研究主題に関連した活動及びその成果

##### (1) 日本語指導担当者会の実施(年間7回)

帰国外国人児童生徒が在籍する学校の担当者や関係機関の担当者が集まり、学期に1~2回実践交流を行うことができた。市内の外国籍児童生徒の実態や各校の取り組みが分かり、共通課題も明らかになって研究を深めることができた。特に14年度はJSLカリキュラムについての学習をし、授業研究ができたことは今後に向けて大きな成果と考えている。

#### 3 推進地域指定としての取り組み及びその成果

##### (1) 高知市教育研究所における教科指導・進路指導・カウンセリング

日本の学校に通学するための基礎となる生活習慣や日本語の習得、さらに日本と学習内容が異なる教科の補充を重点に、教科指導・進路指導・カウンセリングを毎週水曜日に行った。(43回 246時間)その結果、日常会話が向上し、教科の学習に対する意欲の向上がみられた。

##### (2) 日本語教育研究会の実施(年間8回)

日本語指導担当者を中心にして、日本語指導に関する基礎学習に取り組んだ。継続的な研究会の実施は、日本語担当の経験が浅い教員や今年初めて担当する教員にとっては大変参考になり、各校で系統的な日本語指導を実践することができた。

### (3) 中国帰国・外国人児童生徒交流会の開催

親睦と交流を図ることができたこと以上に、既に社会人や大学生になっている先輩や上級生の体験談を聞くことができ、個々の学齢なりに自分の将来の進路について考えることができたことが大きな成果といえる。

## 4 帰国・外国人児童生徒とその他の児童生徒の相互啓発の観点による取組及びその成果

「ことばのとびら教室」で交流学习

国際理解教育としての外国の文化について学習

運動会・音楽会で中国語のアナウンスやプログラムづくり

こうした取り組みは、中国を身近に感じる児童を育てるとともに、中国帰国児童が自分のよさに気づき、自信を持つ機会になっている。また、中国語を読み書きできない児童は、家庭で保護者に教えてもらうことで、中国語ができる親のよさに気づくことができ、より良い親子関係を作ることにもつながっている。

## 5 地域と連携した活動（地域の人材の活用状況等）及びその成果

各校で、中国帰国児童の保護者が講師となった中国料理教室がPTAとも連携して開催されている。中国の文化を知ると共に、地域の保護者との交流の場となると同時に、中国料理を共に作ることを通して、中国帰国者を理解する格好の場ともなっている。年々、参加者数も増えつつあり、参加者が昔の満州や今の中国の様子について質問したり、帰国の保護者が中国にいたときの様子などを話したりすることが、地域での日常的な人間関係の形成に役立っている。

## 6 連携した団体等の概要

高知大学を中心に活動している日本語指導研究会の協力を得て、系統的な日本語指導についての研究を行うことができた。（年間8回）日本語指導担当者の経験や児童生徒の日本語の状態が異なり、多様な対応が迫られる中で、系統的に日本語指導について学習することで日々の実践の基盤を確かなものにすることができた。

## 7 その他特筆すべき平成14年度の成果

平成14年度の大きな成果としては、JSLカリキュラムによる授業の研修会を実施できたことがあげられる。7月に東京で開催された、「平成14年度帰国・外国人児童生徒教育研究協議会」での説明を受けて、10月15日に齋藤ひろみ先生（東京学芸大学国際教育センター）を講師に招いた研究会を実施した。さらに、日本語指導担当者会と日本語指導研究会で学習を深めて2月に授業研究会を開催することができた。